

働きアリの法則

伊東 佳彦



御存じの方も多いと思うが、社会科学の分野の法則に「働きアリの法則」がある。働きアリの社会は、よく働くアリ、普通に働くアリ、サボっているアリの割合は常に2:6:2になるという法則である。よく働くアリ2割を間引くと残りのアリの2割がよく働くアリになり、逆にサボっているアリ2割を間引くとやはり残りのアリの2割がサボっているアリになり、比率は常に2:6:2になるという。

北海道大学の長谷川英祐准教授によると、働くアリと働かないアリの差は「腰の重さ」（専門的には「反応閾値」）だそうである。働きアリの前に仕事が見れると、まず「腰の軽い」（反応閾値の低い）アリが働き始め、次の仕事には次に閾値の低いアリが働く、という形で仕事が増えたり、最初働いていたアリが疲れて休むと、腰の重い（反応閾値の高い）アリが代わりに働き出す。

「よく働くアリ」から見ると不公平に思えるが、組織はこの方が長続きする。自然界での仕事の量や状態に波があるため、普段から全員を目一杯働かせている組織は、より大きな負荷が掛かったときに疲弊・破綻して長続きしない。「サボっているアリ」がいる方が長続きするということである。

小説家の垣根涼介氏がこの法則をモチーフに「信長の原理」という小説を出している。働かせる側の織田信長と働く側の明智光秀や羽柴秀吉の内面が描かれており、大変面白く読んだ。「サボっている」武将を切り捨てていくとどうなるか、是非、御一読ください。

アリならぬ複雑な感情のある人間にどこまで当てはまるかは議論がありそうだが、当てはまるとすると「よく働くアリ」で頑張るのは損をしたような気がするし、かといって「サボっているアリ」と思われるのは落ち着かない。また、自分では「よく働くアリ」のつもりでいても、他人からは「普通のアリ」や「サボっているアリ」と思われているかもしれない。

これを個人の仕事量に当てはめると、どうであろうか？「根を詰めて」働く時間が2割、「普通に」働く

時間が6割、「余裕を持って」働く時間が2割というのが心身ともに無理なく長続きしそうだ。「土日があるじゃないか」と言われそうだが、休みは休みで家族サービスなど忙しい。組織はサボって良いとは言わないので、自分自身で工夫する必要がある。もちろん、サボりの工夫ではなく、より良い仕事を長続きさせるための良識上許される範囲での工夫である。

私は土木分野の地質災害を担当しているが、地質災害は私の都合とはお構いなしに発生する。地質災害が同時多発すると、どれかを選択し残りは丁重に御断りするしかない。日程を押し込み、ぎっくり腰のまま斜面を上がったたり、徹夜明けに災害対応したこともある。「災害は忘れた頃にやってくる」とは寺田寅彦の言だが、「災害は忙しい時にやってくる」のかと思いたくなる。かといって、災害に備えて常に時間に余裕を持って仕事をするわけにも行かず、悩ましい。

個人の能力を上げて「普通」のレベルを上げて備えたいが、社会の変化のスピードのほうが速い。新しく覚えなれないといけなことがどんどん増えているのに覚えられない。年と共に経験値は上がるが、体力は落ちる。まさに「同じ場所にとどまるためには、思いっきり走らなければならない」（ルイス・キャロル：「鏡の国のアリス」）」状態である。

2:6:2のバランスが崩れているかもしれません。あなたは余裕を持って仕事を進めていますか？仕事を楽めていますか？知らず知らずのうちに自分や周りを追い込んでいませんか？ところであなたは、よく働くアリですか？普通のアリですか？それともサボっているアリですか？

（参考文献）

- ・長谷川英祐 (2015)：面白くて眠れなくなる進化論、PHP研究所
- ・垣根涼介 (2018)：信長の原理、角川書店
- ・ルイス・キャロル原作、河合祥一郎訳 (2010)：鏡の国のアリス、角川文庫